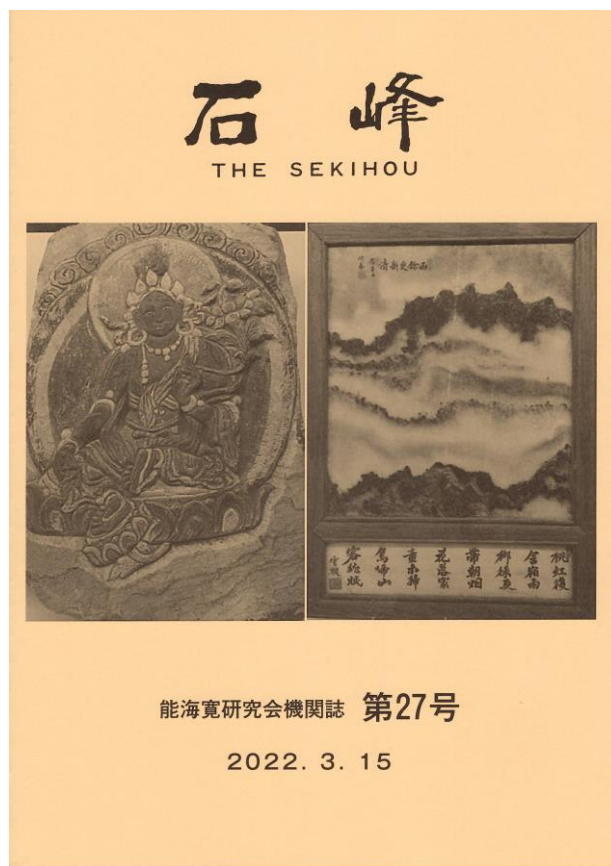


## 『東京南島紀行』全 (M25)

タイトル	「東京南島紀行」(M25)
著者名	能海 寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』 ISSN 1883—4183
号	第 27 号
ページ	94—97
発行年	2022.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)



## 東京南島紀行 全

### 東京南島紀行序

予が明治廿二年冬十二月、西京を去りて、東京に来て已来、同廿三年夏を始めとして、毎年夏は東京近県旅行せり。即ち、第一回は廿三年夏、下総、常陸、下野、上野の諸国を巡遊し、廿四年の夏は、上総、安房、相模、伊豆、駿河、甲斐、武蔵を漫遊し、各々記憶の爲、其紀行を草しおけり。明けて今年も此夏となり、東京の南島に遊び又此紀行を草するゆえなり。

是れ、第参回旅行の記事とす。道中、予の身支度□□。昨、一昨年、少しほぼ同じく、只今年は双眼鏡を有したれば、一増の快を覚へたりき。□□も少しより只記憶の爲めに、記しおきたるものなれば、批評などはまっぴら御免。まづはあらかしこ。

明治廿五年九月十三日記是

山陰 航雲居士

### 東京南島紀行

#### 天頂山 航雲帰帖所記

明治廿五年八月三日 旅行の手足金さえあらば、疾に都にあらざるものを、俸ならぬは浮世の常。国より金のつき様のおそき為、この暑ひ所に辛抱して八月土用暑の真中に居たりける。

先つ□国よりは金着し同便なりし、大野君はすでに一昨日出立。ただひと里、予にありしに大野君はかたじけなくも羽書を送り。予に來れとの事なれば、躊躇もせず用意して谷中無道庵を出発せば七時僅かに一時間を羽書着より費せしむ。

留守中の事は隣の鈴木氏、駒込の渋谷氏へよりてたのみ、切通しに寄り休み、十二時頃、京橋区靈巖寺□□□一時、汽船第廿六号通運丸乗込み、隅田川出帆□□□五十七噸十七馬力なり。此日、やや南風強くして風をはらんで隅田川に出る。帆船、河口より品川沖に至る間無事二百余艘。秀吉の朝鮮征伐出船の時も、如此やあらんとし空想をいだきぬ。東京湾小なりといへども波をかぶる数回。

午後五時、漸く横須賀着港。途方□らず。尋ねまわりて、六時頃、大野君在宿の若松町五十八番石川喜三郎方着。知人、横須賀要塞砲兵軍曹に面会す。此石川氏宅や断崖の上において、東京湾を越江遙に房総の山海をのぞみ、眼下に横須賀町の一部を見る。且つ、冷しき事たとへなく、人は、すずしき事を形容して夏を忘るといへど、此家に居ては、あんまり、すずしくて夏がおもわれ恋しくぞしたわられける。海水に浴し、久しぶりに清き潮水に身を浮ぶ。この夜、散歩に出でて市中徘徊、芝居二幕を見てかへる。

四日 二人軍港近方散歩す。平生に電気のネゲチブポジチブの異性、相合んとするが如く、予は海軍、航海などの文字を見れば、非常の□□にて合はんとするが如く熱心なる。予、此海軍の有様軍艦の錠泊、造船の景況を見ては心もはりさくまで、又感喜せられたり。

『日蓮宗祖真略伝』一部を読む。この夜も、昨夜芝居の続きを見に行く。清水の制限の下題なり。

五日 鈴木、渋谷、山井、菅、麴町へ五本の羽書を出す。

瀧本寺に上り眺望す。八間半の日蓮宗の旧跡□□。

六日 午後、横須賀君来り。予等三人浦賀行。要塞砲兵練習場の大砲卅二インチ等を見、出でて浦賀公園に上り、浦賀町を目下に東京湾口及房総の山を望む。

実に好景なり。途中大津村に東京善福寺銀杏の木分れ、蓮如上人の植えたまへるものありと、又大津村海水浴客あり。

七日 榎沢君来り。案内にて軍港に至り、てんまにて日本帝国軍艦築波号に至る。案内者ありて説明し、一々見物す。古く五十年前のもの。万事、旧整設なれども千九百七十八噸なれば、大にして見るに足る。今は練習の為に用いる位ひのみ。去て巖島号に至る。この号や、当春、仏国より着したるままの最新最大最良の日本第一の軍艦なれば、それだけありて万事器械づくめ、四千二百余噸のものなれば、あつぱれなるものなり。前設の大砲一門は卅二インチにして六万六千キロメートルに達し（誤りあるならん。日本三里斗りと聞きたり）、其外十一門の大砲左右後にあり。実に目を喜ばしめ精神快を覚ゆ。この夜、榎沢の同役野々村軍曹来遊、法花の説法を聞く。

八日 楠浦近方散歩。海水浴は日課。去年房州にて覚へて、より毎日の水練にて幾分上達せり。

九日 要塞砲兵營所近方散歩せり。

十日 四、五日を費して、今日漸く『楚漢軍談』一部十六卷、六百六十項を読み終る。得る所決して少々ならず。又要塞□講本を読み軍艦世界第一等、伊国号等の構造を□□□較して、是れは、日本艦隊何ぞ憐れなるや。榎沢、野々村見せられたり。

十一日 今日、出立せしとせしも、都合に由て延引す。読売新聞を求め内閣變動、伊藤総理已下の報を得たり。この夜寄席に至る。

十二日 今朝出発。大野君、久比里村迄散歩方々見送らる。暫時<sup>ざんじ</sup>休息。之より峠を越へ下浦に出つ。海岸にて沿岸地引網を見る。又テーブルランドを越へ、六合村、三崎町に出て青柳亭投宿。里程六里余を于時、午後二時半、夕食を終へ町内散歩。大島行の船を聞く。この夜直に出帆と聞き、十時頃、和船金長丸乗り込む（三百石位）。聊<sup>いささか</sup>予が、此紀行を東京南島紀行と云う。其南島たる、即ち今顛れたる大島を指すなり。予は早くより、当夏は北海に遊ばんとせしも都合の為、大島漫遊と定めたり。これ予が、横須賀に向て東京を発したるゆえなり。是れ、浦賀、三崎町に來りたる<sup>ゆえん</sup>所以なり。この夜、順風なくして出港せず。

十三日 昨夜は青柳料理亭の珍膳に向ひ如何に変すればとて、今朝は和船の中、茶碗といえは真黒、箸といえは口に当る所、又真黒、膳もなり、碗もなく。只海水にて精げて炊きたるまんまと茄子の古漬のみ穢らわしく口に着くる心地もせざりき。九時頃に至り、ならい風出で来り。直に帆を捲きて出帆す。房州洲の崎沖に至るころより風向変じ大島四、五里の所、至りたるも向う風仕方もなくもとの三崎湊に帰へりける。□□□里、凡そ二十里斗り。この夕上陸、町内七寺一社を巡拝し見物す。当町や日々汽船二艘、東京に魚類を送り、凡そ千戸の町なり。此辺の盆にてにぎおふ。

十四日 船中滞在、大島人等と種々の事情を語す。

十五日 松転灯明台に行きかけ、同道のもの勞れ途中にてやめかえる。遺憾なりき。午後、船頭浦賀のてんまをかり、只ひとりにて城ヶ崎にこぎつけ遊泳、灯明台に至るも時間おそく中を見物する事を得ず。この島周回五十町もあるべく家屋百四、五十戸もあるべし。

十六日 今日は父の正月命日なれば、その事どもおもい出さる。八時過ぎに至り、順風にて出帆せり大島四、五里の所に至りまししも、風かわり、見す見す相模灘漂流。遂に夕方、初島近方に至り、伊豆沿岸天城山を目的にして進む。太陽没し、富士山かくれ、只仰いでは青天の羅星<sup>のぞ</sup>を覗い、伏しては滄瀕<sup>そうかい</sup>三千怒波動揺するを觀し。只双眼鏡を以て村家の火を見らるべきのみ。漂々泊々、只星の傾く遅きを恨むのこと滴露、人の袂を湿らす。

十七日 未明、明、世は漸々と明かるく、飴色の大傘大の太陽洋中より漸々と出ず。精神大いに壯快を覚う。南行する内、正午頃より南風起り、楫を変じて南西より北東大島に向う。是より早くして進む途中霧かかり寸尺を弁せず。磁石只方向を告げるのみ。暫時<sup>ざんじ</sup>にして晴る。見れば大島□□に本村又そこに見る内、噴火口より出る蒸気山□□□。

午後五時過、岡田村に着船す。上陸船本な□□□□馬之助方に投ず。此夜、村内を散歩す。老婆の□□□をまつる等、見物せり。又島の女は皆、紋付紺の着物に荷をば、薪なり水なり、何なり、角なり、皆頭頂に載せ、決して背負わず。其他異風の別天地哉。

我が家のあにやいものくらしをば  
おとづれまいることたのしけり

十八日 家と云えば板の間。只ごぎをしきたるのみ。まわりはくさく、きたなく、ねるにもふとんもなく、かやもなく、只枕一つにてころりと伏すばかり。

この朝、散歩方々泉津村に至り、松吉というものに案内をたのみ、彼の自慢ばなしを聞きつつ桜木の大きなるを見物す。その回り両手のぼして五回りなり。五、六尺斗り上より、十五の枝と分れ一見するに足る。途中、又一(石?)のそり橋を見る。溪、皆噴火口より焼岩の流れ山谷を作りたるものなり。

十九日 再び泉津村に至り案内を得て三原山に登る。砂漠、里、余実に全島の火山よりなること疑うべくもあらず。頂上火口の所には、三十日の修行をなしたるものにあらざれば、案内せずとて、之より急下して行者窟に至り、帰途、鯨の群泳を見る。

当村は、てん草多くとれ、至る所、海中に潜りとる。日々多きは数旬に達すという。この夜およぐ。又天輪王の教会に参す。手まねして礼拝□□始めてみたり。大和の国に起り、神戸を□□せる教なりと。今日五回の飯をなせり。飯□□ゝぎをまぜて常食とす。

二十日 大島近海や浪あらく難船すること多く、昨日も途中帆船の破没して、くさりなを八百貫のものにてつなぎあるを見、又汽船の霧□つにして島にのりあげたることありと。今日は只村内巡遊せるのみ。

二十一日 早朝、金長丸船頭甚九郎と共大島本村に至り、分れて野増村に一休し、差木地にて、おすゑ婆のもとにて休息中食して、夕景波浮港にいたり投宿す。宿とはいえあわれのもの。当港は、一寸ひょうたんりの湊にして五、六百石以下の和船の碇泊によく汽船も一度入港せることありとかや。

ここにいたり大島六村全概況を知ることを得り。岡田村三百戸、泉津村百五十戸、本村八百戸野増村百五十戸差木地三百戸、波浮百五十戸位と見る。合計千八百五十戸、八千の人口、男よりも女多くはあらざるやに見うけられ、牛口二千を下らず。

多くは女牝牛なり。三原山二千五尺十二呎の高さ 又伊豆及七島よく見ゑ晴天には八丈をもかすかに見るべくを得て、この島の物産は山七海三にて、薪を東京に出し、船は多く島及び伊豆船にて島中五、六十艘の百石以上の帆船あるべし。風俗は大□□□一家族の如く親しく男女とも牛をおいぐさかりに山に行く。山はなだらかけんそなり。島人□□と分ち、国人の商売に来るものも少くはあり。

廿二日 当港より渋谷、大野、槇沢へ三本の羽書を出す。朝発して、もとの道にかへり、差木地一休。野増に帰り、今日家に休息中飯に。この家の主人は下田のたしか士族と見ゑ、六十四、五の老翁にて、弍年前老後の安楽とて、この島にわたり。愚民、合手に店を開き於る様の口ぶりなり。下田へ、ペルリの着したる時のはなし、実見のことなどくわしくかたり。

納冷四時間斗りを費やせり。本村を経十時頃岡田帰着。途中、海水浴を数回なしたり。

廿三日 同道を得て、此朝一里半余山腹の湯場に至る。只岩石の間よりふき出す湯気のみにして家を立て湯治にゆく。水なく人常に住まず不便なり。この所よりよき見はらしありて、軍艦などの通るを見る。まさに快哉。島内各村、各々己れの村をほめ、他をふわにす。世間しらず。如<sup>かくのごとく</sup>此争をかな

す。あわれむべし。

廿四日 今朝、別れを告げ泉津村に至り、便船三社丸に乗る。この日、陸より正しく鯨のつかれるを見る。実に、いさましきもの哉。一とはね尾をふる。□舟玉浪の間に入り見えざる暫時なり。房州紀□来りて二社あり。一は岡田に、一は泉津村に居る□□□頭を得他につきたるものがせしと聞く。□□村にて入浴中一人の船頭、物語を聞く。

曰く、今朝、予□□船波浮より五、六里出でて転倒し、この身一つに上陸せり。人に損をかけ迷惑をかけ、人目に出る事を見ず。これも乗り組の若ものどもの、我いう事を聞かざるによると、さもかなしげになんぎをこすりこすり語れり。実に気の毒のことなる哉。

午後四時頃、予の船は出帆す。乗合人中一人は、鯨のもりにてけがをなし。東京行の人ありたり。この船四百石位にて、金長丸よりも食物よく礼おも知れり。これ伊豆船なる内へか、まともに風をうけて大島噴気、段々と遠くなり、三ヶ月出でて、又景な里。

廿五日 朝四時頃、浦賀着。一寸上陸して横沢及高見へ二本羽書を出す。八時頃出帆、観音崎引潮にて二時間も時を費し、十日の郷里横須賀を遙かに見て東京湾に進入す。

午後四時頃、無事隅田川鉄砲洲に着上陸。乗車して切通し花田の房に至り。談話方々宿せり。

廿六日 朝、谷中無道庵帰着せり。ここに東京近県紀行第三回東京南島旅行終を告ぐ。この日、谷中諏訪神社祭礼なり。

概略 相模、伊豆二ヶ国

里程凡そ百四十里 内海里貳百里、乗船(百里) 内四十里歩行

日数 満廿三日間

[駿河伊豆、相模、武蔵、下総、上総、安房と大島の地図、航跡を記載した図]

明治廿五年九月十三日記之

東京南島紀行終

【付記】この「東京南島紀行」の活字化は、松本誠一氏。大島古文書の会の藤井虎雄氏・時得孝良氏の助言を得て完成。定例学習会でテキストとして使用したものである。

